

研 究

乳幼児の長時間視聴に関連した要因の探索

—育児環境と母親の意識に焦点をあてて—

若松美貴代¹⁾, 武井 修治²⁾

〔論文要旨〕

1歳6か月児健康診査に来所した母親を対象に、児のテレビ・ビデオの長時間視聴の背景にある因子を育児環境や長時間視聴に対する意識との関連で検討した。

その結果、テレビがついている時間数（以後、TV-on 時間と表記）は育児や家事の「手伝いのない」群、外遊びに「消極的」な群で有意に長かった。また TV-on 時間「5時間超」群と「2時間以下」群の比較では、「5時間超」群で視聴開始時期が有意に早く1歳前の児のテレビ・ビデオ視聴に関しても「見せない方がよい」と考えている母親が有意に少なかった。

以上から、上記の育児状況にある家族に対し、テレビ・ビデオ視聴の影響について正しい知識や情報を提供することが示唆された。

Key words : 1歳6か月児, 育児環境, テレビ・ビデオ視聴, 育児支援

I. 緒 言

近年の情報化社会は、メディア接触の低年齢化、長時間化、多様化を招き、乳幼児においてもテレビ・ビデオの長時間視聴が乳幼児の生活習慣や言語発達へ悪影響を及ぼすことが報告されている^{1~4)}。日本小児科医会「子どもとメディア」対策委員会は、テレビ・ビデオ視聴を含むメディア接触の低年齢化、長時間化が外遊びの機会を奪い、人とのかかわり体験の不足を招き、言葉や心の発達を妨げるとして「子どもとメディア」の問題に対する提言を発表した⁵⁾。この提言に対しては視聴時期、視聴時間とその方法、番組の内容など、子どもの発達に関する専門的な立場からさらなる検討が必要⁶⁾であると思われるが、テレビ・ビデオ視

聴が乳幼児の生活習慣や発達に与える影響は否定できない^{7,8)}。

テレビ・ビデオ視聴と生活習慣に関するこれまでの調査では、テレビ視聴時間の長い幼児は就寝・起床のリズムが安定せず、就寝時刻が遅く、食習慣や排便習慣も不規則であることなどが報告されている^{9,10)}。また児の起床時間はその後の成長発達にも影響を及ぼすことから、早期に児の生活リズムを整える必要性が示唆されている¹¹⁾。

テレビ・ビデオ視聴させる年齢に関する調査では^{12,13)}半数近くが1歳前から始まっている。これらの結果はテレビ・ビデオ視聴が子どもの意思によってではなく、親の都合や事情で視聴させていることを示している¹²⁾。

A Study of Factors Related to Longer-time TV/Video Watching in Infants
— Focusing on Mothers' Nursing Environment and Awareness for TV/Video Watching —
Mikiyo WAKAMATSU, Syuji TAKEI

1) 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻母性・小児看護学講座（助産師）

2) 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻母性・小児看護学講座（医師）

別刷請求先：若松美貴代 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻母性・小児看護学講座

〒890-8544 鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax : 099-275-6792

[2418]

受付 12. 3.12

採用 13. 1.30

このようにテレビ・ビデオ視聴と生活習慣や言語発達との関係、長時間視聴の実態調査はあるが、母親が育児の中でどのような生活背景や意識をもって視聴させているかについては十分な調査は行われていない。また最近の育児環境の背景を捉え、育児支援に視点をおいた調査はみられない。

そこで本研究ではテレビ・ビデオの長時間視聴の背景にある育児環境を調査し、乳幼児を持つ母親が、どのような生活背景や意識を持ってテレビ・ビデオ視聴させているかを明らかにすることで、乳幼児を持つ母親の育児支援の一助とする。

II. 研究 方 法

1. 対 象

本研究では母親の意識や視聴させる理由、生活背景を明らかにすることが目的であるため、子どもの意思によって視聴し始める時期より前で、なおかつ視聴が始まって間もない時期を選定する必要があると考えた。そこで A 県内の B 市、C 市、D 市の人口集中地区の保健センターに健康診査目的で来所した 1 歳 6 か月児を持つ母親を本研究の調査対象として選定した。

2. 調査方法

2009 年 8 ～ 9 月の間に、1 歳 6 か月児健康診査が実施された県内 5 ケ所の保健センターにおいて実施した。調査に先立ち母親に本研究の目的と意義、研究の不参加や辞退が児の健診の不利益にならないことなどを説明した。これらの説明に対し、本研究への理解や承認が得られた場合のみ無記名自記式の調査票を母親に配布し、同日のうちに回収した。

調査票は、対象者の属性、児のテレビ視聴の有無、開始年齢、視聴時間・時間帯、視聴させている番組内容や状況、子どもを持つ前の育児経験の有無、子育てサークルへの加入状況などから構成された内容である。なお、本研究は鹿児島大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 分析方法

視聴時間の解析にあたっては回答者である母親の視聴時間の認識のずれや混乱が生じないように、平日の 7 ～ 23 時半の時間帯で、子どもが起きてテレビを「見る」、「見ない」と関係なしにテレビがついている時間を「TV-on 時間」と定義した。TV-on 時間を群間で

比較するにあたり、正規性の検定を行ったところ、正規分布に従わないことが確認されたためノンパラメトリックな手法である Mann-Whitney U 検定を用いた。TV-on 時間の長短に関連する要因の検討では、TV-on 時間分布を「5 時間超」群と「2 時間以下」群の 2 群に分けたところ、上位 30% と下位 30% に相当した。これらの 2 群において、各要因別の比率を χ^2 検定で解析した。データの集計・解析には spss ver.17 を使用し有意水準は $p < 0.05$ とした。

III. 結 果

1. 基本的属性 (表 1)

311 名より調査票を回収した中で、児にテレビを視聴させていないと回答した 7 名を除いた 304 名からの回答を解析対象とした。解析対象となった母親の平均年齢は 31 歳であり、就労状況としては非就労者が 60% を超え、そのほとんどが専業主婦であった。就労している母親の中で正規社員とパートはほぼ同数であった。以上の就労状況から、少なくとも 60% 以上の調査対象者は自宅で過ごしている時間が長いものと考えられた。

2. 対象児のテレビ視聴状況 (表 1)

対象児の視聴開始時期は平均で 9.98 ± 3.33 か月で、1 歳までに視聴開始するものは全体の 54.2% と半数を超えていた。TV-on 時間については平均 4 時間を超えていた。

表 1 対象者の基本的属性			
母親の平均年齢		31.22 ± 5.07 歳	
母親の 就労 状況	非就労	専業主婦	188 名 (61.8%)
		育児休暇中	9 名 (3.0%)
	就労	正規職員	45 名 (14.8%)
		パート	54 名 (17.8%)
		自営業	5 名 (1.6%)
	その他		2 名 (0.7%)
	無回答		1 名 (0.3%)
子ども数	1 人	129 名	(45.7%)
	2 人	122 名	(40.1%)
	3 人	39 名	(12.8%)
	4 人	4 名	(1.3%)
対象児の月齢		18.57 ± 0.041 か月	
性別	男児	166 名	(53.4%)
	女児	143 名	(46.0%)
TV-on 時間		4.44 ± 3.04 時間	
視聴開始時期		9.98 ± 3.33 か月	

表2 各要因群のTV-on 時間

	平均値	標準偏差	p 値
非就労	4.948	3.247	0.001
就労	3.480	2.339	
手伝いあり	4.413	3.023	0.029
手伝いなし	5.471	2.080	
一人っ子	4.093	2.966	0.023
兄弟あり	4.747	3.080	
外遊び積極的	4.211	2.902	0.013
外遊び消極的	5.302	3.352	

表3 視聴開始月齢

TV-on 時間	平均値	標準偏差	p 値
2 時間以下	10.925	3.188	0.002
5 時間超	9.439	3.175	

3. TV-on 時間に影響する因子の検討

1) 母親の就労状況と視聴状況 (表2)

母親の就労状況を「非就労」と「就労」に分け、TV-on 時間との関連を分析すると、「非就労」群のTV-on 時間は「就労」群に比較して有意に長かった ($p < 0.001$)。「非就労」、「就労」群のそれぞれで視聴状況を「子どもだけで見せていることが多い」群と「親と一緒に見ていることが多い」群とで比較したが、非就労・就労別で有意差はなく、視聴状況の違いはみられなかった。

2) 家事・育児のサポート状況 (表2)

育児や家事を主に手伝ってくれる人がいる母親を「手伝いあり」、手伝ってくれる人がいない母親を「手伝いなし」とし、TV-on 時間との関連を分析した。その結果、「手伝いなし」群のTV-on 時間は「手伝いあり」群に比べて有意に長かった ($p = 0.029$)。

3) 兄弟の有無 (表2)

対象児の兄弟の有無とTV-on 時間との関連を分析した。その結果「兄弟あり」群のTV-on 時間は「一人っ子 (兄弟なし)」群に比較して有意に長かった ($p = 0.023$)。

4) 外遊び実施状況 (表2)

平日、子どもに「外遊び」を「よくする」、「時々する」と答えた母親を、外遊び「積極的」群、「ほとんどしない」、「全くしない」と答えた母親を、外遊び「消極的」群として、TV-on 時間との関連を分析した。その結果、外遊び「消極的」群でTV-on 時間が外遊び「積極的」群に比較して有意に長かった ($p = 0.013$)。

5) その他

育児サークル参加状況、読み聞かせ実施状況、買い物・散歩実施状況、母親の育児経験では有意差はなかった。

4. TV-on 時間の長短に影響する因子の検討

1) 視聴開始月齢 (表3)

TV-on 時間の長短を分布の上位30%に相当する「5 時間超」群と下位30%に相当する「2 時間以下」群の2群に分け、視聴開始月齢との関連を分析した。その結果、TV-on 時間が「5 時間超」群のテレビ視聴開始月齢は「2 時間以下」群に比べて視聴開始が有意に早かった ($p = 0.002$)。

2) よく見せる番組、ビデオとの関連

子どもによく見せる番組やビデオ (DVD を含む) の違いがTV-on 時間の長短に関連するかを、よく見せる番組や内容に関しては、NHK の子ども番組、民放の子ども番組、大人が見たい番組で、ビデオに関しては、NHK の子ども番組の録画、民放の子ども番組の録画、子ども向け (キャラクター) のビデオ、通信制の教育教材ビデオ、英語教材ビデオ、大人が見たいビデオで検討した。両群で有意差はなかった。

3) 視聴させる理由 (図1)

テレビ・ビデオ視聴させる理由 (複数回答) が

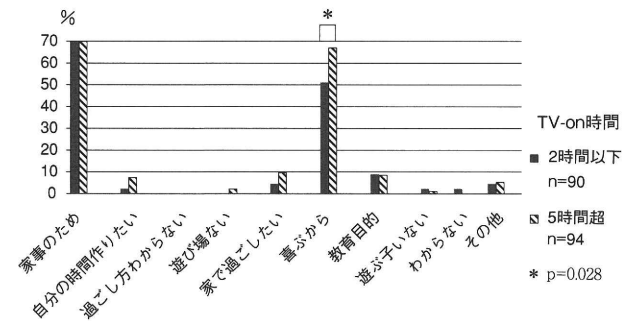


図1 TV-on 時間の長短と視聴させる理由 (複数回答)

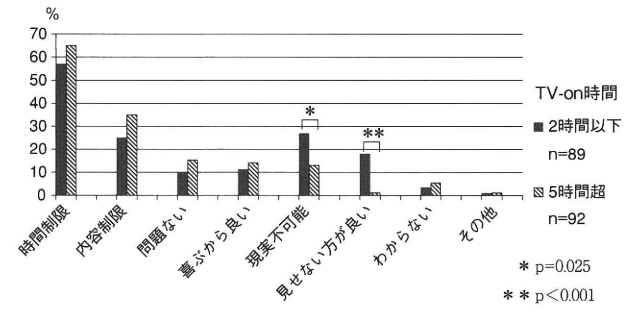


図2 1歳前の子どものテレビ・ビデオ視聴に関する考え (複数回答)

TV-on 時間の長短に関連するかを検討した。その結果、「家事のため」と答えた母親は「2 時間以下」、「5 時間超」両群とも70%を超えて最も多かったが、有意差はなかった。一方、「子どもが喜ぶから」と答えた母親は「5 時間超」(67.0%) 群に多く、「2 時間以下」(51.1%) 群とは有意な差を認めた ($p=0.028$)。

4) 母親の「1 歳前の子どものテレビ・ビデオ視聴に関する考え」との関連 (図2)

「1 歳前の子どものテレビ・ビデオ視聴に関する考え」(複数回答) が TV-on 時間の長短に関連するかを検討した。その結果、「時間制限すれば良い」と答えた母親は両群ともに最も多かったが有意差はなかった。「(見せない方が良いが) 現実には不可能」と答えた母親は「5 時間超」群で13%、「2 時間以下」群は27%と有意に差があった ($p=0.025$)。また、「見せない方が良い」と答えた母親は「5 時間超」群で1.1%であり、「2 時間以下」群の18%より有意に少なかった ($p<0.001$)。

IV. 考 察

厚生労働省の「児童のいる世帯における末子の年齢階級別、母親の仕事構成割合 (平成19年)」¹⁴⁾によると、母親の仕事構成割合は末子の年齢が関係している。1 歳の子どもの場合末子にいない場合には就労者の割合は34.8%、2 歳の子どもの場合41.5%と末の子どもの年齢が高くなるほど就労者の割合も高くなっている。本研究対象者の対象児の年齢は1 歳6 か月前後の児で、就労者の割合は38.3%であることから、厚生労働省の調査に近い結果であった。また、本研究の対象となった世帯の平均子ども数は1.7人で、厚生労働省の「18 歳未満の子どものいる世帯の平均児童数」¹⁵⁾の1.71人とほぼ同じであった。これらのことから、本研究の対象はわが国の一般的な1 歳6 か月児を持つ母親と考えられた。

TV-on 時間は周囲の家事や育児を手伝ってくれるサポートがあるかないかに関連し、また、「非就労」の母親は「就労」の母親に比較して、TV-on 時間が長かった。自宅で過ごしている時間が長いことが予測される「非就労」の母親は、時間的余裕があると捉えられ、周囲の支援の対象から見落され易い。視聴理由の「家事をするため」が最も多かったことからわかるように、子育てや家事を手伝ってくれる人がいないためにその間の子守りとしてテレビをつけ、家事や育

児をしているということがうかがわれた。つまり、「非就労」の母親にこそ支援が受けられているかという視点が必要である。「一人っ子」と比較して「兄弟あり」の TV-on 時間が長かったことも、上の子がテレビをつける可能性だけでなく、どちらかの子どもに手を取られている間に子守りの役割¹⁶⁾を期待して視聴させているのではないかと考えられた。TV-on 時間と育児実施状況に関しては、「外遊び」に比較して室内での静的な遊びである「読み聞かせ」と TV-on 時間は関連がなく、「外遊び」のみ関連があり、「外遊び」が「消極的」である母親は「積極的」な母親に比較して TV-on 時間が長かった。加古は乳幼児の日中の活動は親に依存するため、育児行動が子どもの活動の質と量に反映されやすいことを指摘している¹⁷⁾。また服部⁹⁾は子どものテレビ視聴への関与は、親の育児姿勢を反映するものであり、子どものしつけや家庭教育に対する認識の程度と関連するものであると述べている。本研究においても、「外遊び」に対して消極的な母親の育児姿勢が TV-on 時間に影響したのではないかと考えられた。母親が外遊びさせるか否かの因果関係については、近所に遊び場があるか否かにはほとんど関係がなく、子育て仲間、おしゃべりする仲間の存在である¹⁷⁾と言われている。これらのことを踏まえ、今後も家庭におけるしつけや教育の中に、テレビ・ビデオ視聴に関する認識を高めさせる具体的な取り組みと、子育ての仲間作りへの支援が必要と思われる。

母親のわが子を持つまでの育児経験と TV-on 時間について有意差はなかったが、育児経験のない母親が TV-on 時間が長い傾向にあった。また、本研究では母親の育児スキルと視聴させている理由、育児経験と視聴状況との関連も分析したが関連はなかった。原田¹¹⁾によると子どもとの接触経験や育児経験のあった母親は「子どもの要求の理解」も良く、「子どもとの関わりの時間」が多い、など育児そのものが良い結果を示していることから、TV-on 時間へ影響を与えるであろうと予測したが、今回の研究では、育児経験が直接的に TV-on 時間に影響していなかった。今後は質問内容を検討し、育児スキルや育児経験の程度に関しても、さらに詳しく分析する必要がある。

視聴開始月齢では TV-on 時間が「2 時間以下」群10.925か月、「5 時間超」群9.439か月で長時間視聴群の視聴開始が早かった。遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表の移動運動によると、9.4 か月は児が座位から

「つかまって立ちあがる」、10.9か月は「つたい歩きをする」や、「座った位置から立ち上がる」こともできるようになる時期である。つまり、「5時間超」群の視聴開始は、児が座位から「物につかまって立つ」ようになる時期に、「2時間以下」群は「つたい歩き」や「立ち上がる」時期で、両群ともに児の移動運動が大きく発達する時期に関与している。児の活動範囲が広がることにより、母親はより一層目が離せなくなり、子守り代わりとしてやむなくテレビやビデオを視聴開始させるきっかけになることが推察される。

TV-on 時間「2時間以下」群と「5時間超」群で、視聴させる第一の理由は「家事のため」であり両群に有意差はなかった。そのほかの「自分の時間を作りたいから」、「家で過ごしたいから」などの母親側の理由や「遊び場がない」、「遊ぶ子がいない」など環境に関しての理由はほとんどなく、子どもが「喜ぶから」が両群ともに2番目に多かったことから、子どもを中心に考えている母親が多いことがわかった。しかし、「喜ぶから」と回答した母親の比率に関しては両群に有意差があり、1歳前の子どものテレビ・ビデオ視聴に関しての考えでも同様、「現実不可能」、「見せない方がよい」と回答した母親の比率にも有意差があったことから、両群間にTV視聴に関する認識の違いがあることが示唆された。

乳幼児のテレビ・ビデオ視聴の負の影響を避けるためには、視聴させる理由が、「家事をするため」であるということから、児が寝ている時間や比較的機嫌の良い午前中の時刻に家事を済ませたり、コマ切れの隙間時間でできる家事を行ったりなど、母親がテレビ・ビデオに子守りを任せっぱなしにしなくても良い方法を広報活動していくことや、地域での子育てサポーターの活用を広げていくことも必要である。また、視聴開始月齢が児の移動発達に関与していることも加味し、ハイハイやつかまり立ちの時期で、外で遊べない乳児が親子で安全に遊べるように施設を整備し、利用者同士が早い時期から接点を持てるように働きかけ、仲間作りの支援や、地域での繋がりやの土台を作っておくことも必要であろう。さらに母親が周囲のサポートを得られるように、社会全体で子育て期にある母親を理解し子育てを考えていくことと、テレビ・ビデオ視聴の影響についても正しい知識や情報を提供し各家庭で考える機会を作っていくことが必要である。

今回の調査では、母親がテレビ・ビデオ視聴に関す

る正しい知識や情報を得ることができていたかの調査が実施されていない。今後の調査と合わせて母親の認識についても調査し、正しい情報としてテレビ・ビデオ視聴の負の影響を伝えていく必要がある。また、TV視聴時間については児がTVを視聴している、いないにかかわらず、「テレビがついている時間」をTV-on 時間として解析した。そのため、実際の児のテレビ・ビデオ視聴時間とは言えないが、児がテレビやビデオに興味を示せば、視聴することになる潜在的な視聴時間も含まれており、決して看過できない時間を表している。テレビ・ビデオは視聴させる意思がなければつけたままにせず、テレビを消すという家庭での取り組みも必要であろう。

V. 結 論

本研究において、テレビ・ビデオの視聴の背景にある育児環境を調査した結果、TV-on 時間は家事や育児のサポートに関連しており、母親は子どもにテレビやビデオをつけることで子守りの役割も求めている。また、視聴開始が早い児はTV-on 時間が長時間になる傾向にあった。

以上の結果から、乳幼児のテレビ・ビデオ視聴の負の影響を避けるためには、母親が周囲のサポートを得られるように、子育て期にある母親を社会全体で理解し子育てを考えていくことと、テレビ・ビデオ視聴の影響についても正しい知識や情報を提供し、各家庭で考える機会を作っていくことが必要である。

謝 辞

今回、本研究の趣旨にご理解いただき、協力してくださいました方々、ならびに施設関係者の方々に心より感謝申し上げます。

本研究は、第57回日本小児保健学会学術集会で（2010年9月、新潟市）において発表したものに加筆修正したものである。

文 献

- 1) 片岡直樹. 新しいタイプの言葉遅れの子どもたち—長時間のテレビ・ビデオ視聴の影響—. 日本小児科学会雑誌 2002; 106 (10): 1535-1539.
- 2) 澤井 遵, 浅 純一, 藤本 保, 他. 「子どもとメディア」に関する意識調査—乳幼児期のテレビ・ビデオ長時間視聴が子どもの発達、行動におよぼす影響.

- 日本小児科医会会報 2005; 30: 113-119.
- 3) 加納亜紀, 高橋香代, 片岡直樹. テレビ・ビデオの長時間視聴が幼児の言語発達に及ぼす影響. 日本小児科学会雑誌 2004; 108 (11): 1391-1397.
 - 4) 片岡直樹. 乳幼児のコミュニケーション障害とテレビ・ビデオ視聴の関係. 周産期医学 2008; 38 (5): 597-601.
 - 5) 社団法人日本小児科医会「子どもとメディア」対策委員会:「子どもとメディア」の問題に対する提言. 子どもとメディア—乳幼児を中心として—. 社団法人日本小児科医会, 2007: 46-47.
 - 6) 小児神経学会. 「子どもに及ぼす影響」について. [http: // child-neuro-jp.org/visitor/iken2/5.html](http://child-neuro-jp.org/visitor/iken2/5.html) 2010.2.9.
 - 7) 伊藤幸生, 秋山千枝子, 石黒成人, 他. 「子どもとメディア」に関する意識調査 0歳から2歳児のメディア環境の現状について—テレビやビデオ視聴2時間の影響—. 日本小児科医会会報 2005; 30: 120-125.
 - 8) 服部伸一, 足立 正. 幼児の就寝時刻と両親の帰宅時刻並びに降園後のテレビ・ビデオ視聴時間との関連性. 小児保健研究 2006; 65 (3): 507-512.
 - 9) 服部伸一, 足立 正, 嶋崎博嗣, 他. テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響. 小児保健研究 2004; 63 (5): 516-523.
 - 10) 栗谷とし子, 吉田由美. 幼児のテレビ・ビデオ視聴時間, ゲーム時間と生活実態との関連. 小児保健研究 2008; 67 (1): 72-80.
 - 11) 原田正文. 母親について. 原田正文著. 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防. 初版. 名古屋: 名古屋大学出版会, 2006: 138-162.
 - 12) 土谷みち子. 乳幼児のメディア生活の実態と臨床的保育内容—神奈川県未収園児の生活調査から—. 家庭教育研究所紀要 2000; 22: 88-100.
 - 13) 小島正子, 松井秋子, 佐々木純子, 他. 乳幼児のテレビ・ビデオ視聴に関する実態と母親への意識調査. 外来小児科 2004; 7 (2): 161-164.
 - 14) 厚生労働省大臣官房統計情報部「平成19年度国民生活基礎調査の概況」2008.
 - 15) 厚生労働省大臣官房統計情報部「国民生活基礎調査」2008.
 - 16) 土谷みち子. 子どもとメディア—乳幼児早期からの

テレビ・ビデオ接触の問題点と臨床的保育活動の有効性—. 国立女性教育会館紀要 2001; 15: 35-46.

- 17) 加古真紀. 睡眠・覚醒リズムと日常生活に関する分析と考察. 平成16年度厚生労働省科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)「児童虐待発生要因の構造分析と児童虐待への予防的支援方法の開発に関する研究」. 2004: 81-93.

[Summary]

Factors relating to longer-time TV/Video watching in 1 year and 6 months infants were studied in their mothers from their nursing environment and awareness for the effect of TV/Video watching in infants.

As the result, the duration of TV/Video were switched-on (TV-on time) was statistically longer in mothers who had no supportive help for their nursing and housekeeping, and in mothers with passive feeling for outside-play with their infants.

Age at starting TV/Video watching was statistically earlier in infants whose TV-on time was more than 5 hours than that was less than 2 hours. In addition, incidence of mothers who recognized negative effect of TV/Video watching before 1 years old was statistically lower in infants whose TV-on time was more than 5 hours than that of less than 2 hours.

In conclusion, in order to avoid negative effects of TV/Video watching for infants, providing precise information and supportive help is essential for nursing mothers especially in specific nursing environment.

[Key words]

1 year and 6 months infants, nursing environment, TV/Video watching, child care support